



和's YAMATO (わづやまと)

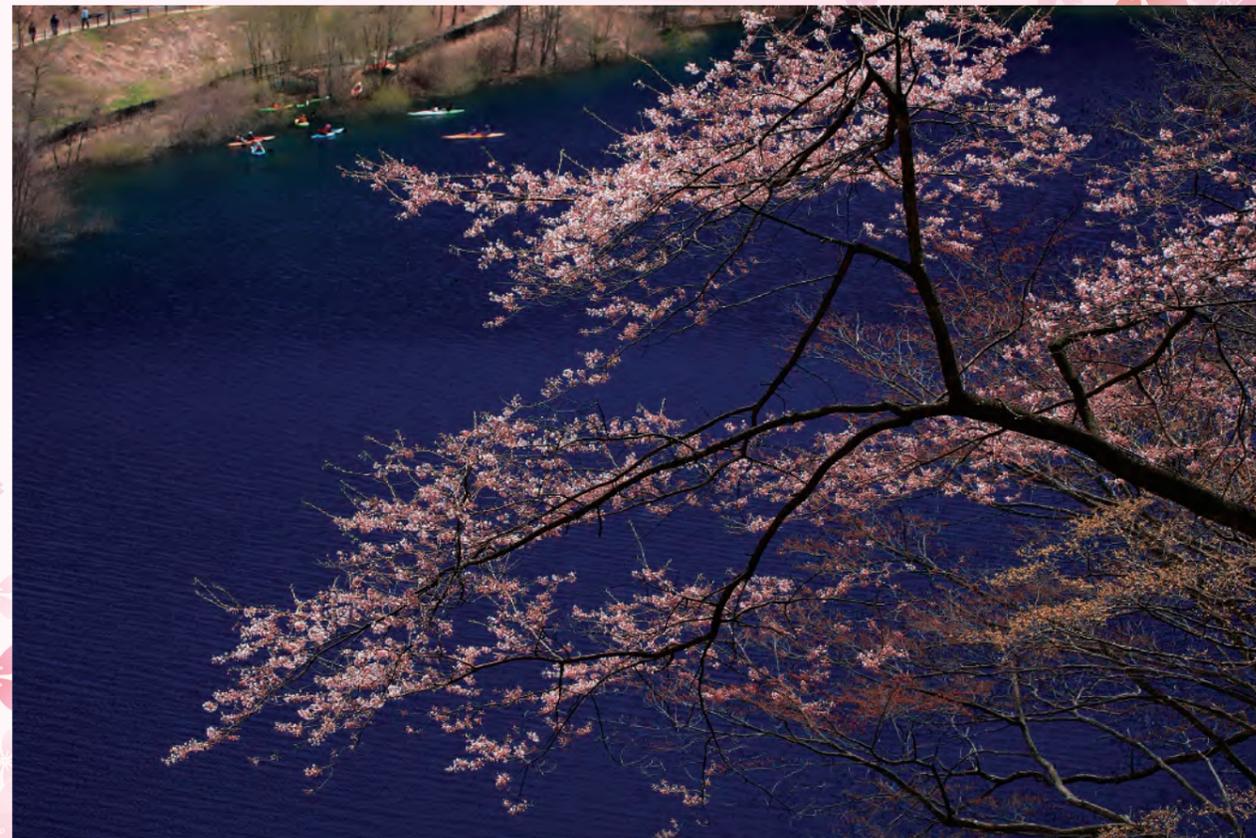
2025
春号

- 写真で楽しむ美しい自然
「桜と四万ブルー」―四万ダム湖 春の訪れ―
- 群馬の芸術家 池田実穂
- 郷土史跡めぐり 大室古墳群(前橋市)
- 安心・安全な生活を支える福祉施設
特別養護老人ホーム竜泉
竜泉福祉センター「いきいきてらす」
- 吉原遊郭 名所・旧跡をめぐる
- 「べらぼう」全体相関図と主な登場人物
- 狂歌師太田南畝との交流、萬屋と歌麿の蜜月時代
- 黄表紙の隆盛、山東京伝の登場
- 出版事業を拡大し日本橋に進出

江戸の出版界に旋風起こす「江戸のメディア王」
萬屋重三郎の卓越した手腕



「森のたまもの」ムベとナミアゲハ 須藤和之画



写真で楽しむ 美しい自然

『桜と四万ブルー ―四万ダム湖 春の訪れ―』
2003年3月撮影

《撮影》藤重朋紀氏

略歴	1952 群馬県利根郡みなかみ町生まれ	2001 フリー
	1971 群馬県渋川高等学校卒業	2010 写真集「上州路―一本桜」
	1972 東京写真専門学校中退	2011 写真集「上州路」
	1979 コマーシャルフォトスタジオ創美社	



表紙の絵
「森のたまもの」ムベとナミアゲハ
《F6号》

須藤 和之 プロフィール

Kazuyuki Sutoh Profile

1981年 群馬県前橋市生まれ
 2005年 多摩美術大学絵画学科日本画専攻卒業 2007年 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻 保存修復日本画修了 2010年 同大学大学院 保存修復日本画博士課程修了 博士号取得 博士審査展 お仏壇のはせがわ賞特別賞 個展(画廊翠樹)(同2011~24) 2011年 中央電機商会カレンダー原画(2011~24) 2013年 アーツ前橋開館記念展出品、群馬銀行創立80周年記念収蔵作品制作 2014年 個展(日本橋三越本店)(同2017,20,23) 2017年 群馬県展 県知事賞 2016年 個展(株式会社ヤマト)
 2019年 高崎市タワー美術館トップランナーIII出品 2020年 上毛芸術文化賞受賞 2022年 個展(株式会社ヤマト)
 2023年 群馬銀行創立90周年記念 収蔵作品制作 現在 日本美術院院友 群馬県美術会会員 慶應義塾大学非常勤講師(2013~24)
 OFFICIAL WEBSITE:SUTOOO.NET URL <http://sutooo.net/>

和's YAMATO わづやまと
2025年春号(第64号)

《和's YAMATOの由来》ヤマトの漢字の「和」、Water & Airの頭文字を合わせて「WA」、「S」はスタート。
 和'sYAMATO初春号 2025年(令和7年)3月発行
 発行:株式会社ヤマト広報室 群馬県前橋市古市町118 TEL.027-290-1891 FAX.027-290-1896

建設プロダクト ヤマト

【発行】株式会社ヤマト 〒371-0844 群馬県前橋市古市町118 TEL:027-290-1800(代) FAX:027-290-1896
 支店/東京、埼玉、栃木、横浜、千葉、高崎、東北 営業所/軽井沢、伊勢崎、神奈川県央、茨城、太田、東松山、長野、渋川、川口、多摩、横須賀、青森
 附属施設/大和環境技術研究所、大和分析センター、加工センター、朝倉工場、教育センター、コンタクトセンター、サポートセンター、プロダクトセンター
 ヤマトホームページ <https://www.yamato-se.co.jp/>



Tsutaya Juzaburo

葛屋重三郎の卓越した手腕

葛屋重三郎は江戸時代の安永元年(1772)に、浅草・吉原で貸本屋を開業し、わずか10年ほどで江戸の出版界をリードする地位を固め、才能のある作家や絵師を発掘し、「江戸のメディア王」、「江戸文化のプロデューサー」と称されるようになる。世襲による既得権益の継承が主流の時代に、一代での劇的な躍進の背景には、田沼意次による経済活性化策と社会の自由化がある。重三郎はその時流に乗って出版メディアの新たな企画を連発し、江戸文化をけん引したのだった。

出版事業を拡大し日本橋に進出

吉原を拠点として安永元年(1772)に出版界にデビューした重三郎は、天明3年(1783)9月に、日本橋の通油町(とおりあぶらちよう)(現東京都中央区大伝馬町)に店舗と倉庫用の蔵を購入し、新たな拠点とした。吉原細見を販売していた五十間道の店は手代の徳三郎に任せ、重三郎は通油町で耕書堂を新規開店した。日本橋への移転とは、単に拠点を移した

ここにも重三郎は、吉原の書店・版元から、江戸の主要な出版事業者となる地本問屋に出世する。武士の世界にせよ、町人の世界にせよ、当時は世襲全盛の時代だった。しかし、何の経験もなく出版という未知の業界に飛び込んでからわずか10年ほどで、江戸の一等地日本橋に地本問屋として店を構えるまでになったのはまさに奇跡といつてよいだろう。重三郎34歳の時である。吉原から日本橋への進出を機に、重三郎の出版事業は大いなる飛躍を遂げるのである。



江戸日本橋『富嶽三十六景』
国立国会図書館デジタルコレクション

黄表紙の隆盛

安永9年(1780)、重三郎は黄表紙の出版を開始する。黄表紙は、草双紙(庶民向けの絵入り読み物)の一種で、読者層を大人に想定した娯楽小説だ。草双紙は時代によって呼び名が異なり、赤本、黒本、青本と呼ばれていたが、安永4年(1775)に大ヒットした恋川春町作の「金々先生栄花夢(きんきんせんせいえいがのゆめ)」の表紙が黄色だったことから、黄表紙と呼ばれるようになった。その後、朋誠堂喜三二(ほうせいどうきさんじ)の「当世風俗通(とうせいふうぞくつう)」が刊行されるなど、同スタイルの小説が次々と出版される。春町、喜三二の出版物は鱗形屋が扱っていたが、鱗形屋は安永4年に手代が起こした重版事件で処罰されたため、経営難から立ち直れず、江戸の出版界から退場する。

鱗形屋と入れ替わるように春町や喜三二の黄表紙を出版し、二人を専属的な作家に出来たのが重三郎だった。黄表紙は、当時の流行や世相を、文章や絵を巧みに織り交ぜた内容で、大人の読者向けの娯楽小説として人気を博した。恋川春町は駿河小島藩士の倉橋格という武士であり、

朋誠堂喜三二は秋田藩士の平沢常富という武士だった。二人とも武士の身分でありながら、ペンネームを使って黄表紙や洒落本を執筆し、人気作家として活躍した。

山東京伝の登場

黄表紙市場が活況を呈する中、葛屋重三郎は山東京伝という新たな才能を発掘する。京伝は質屋の息子として生まれ、若い頃から浮世絵師の北尾重政に絵を学んでいた。

文才にも長けており、安永7年(1778)に黄表紙「開帳利益札遊合(かいちょうりやくのめくりあい)」でデビューした。京伝の才能に注目した重三郎は、当初は挿絵を依頼していたが、やがて黄表紙の執筆も依頼するようになる。天明5年(1785)に出版した「江戸生艶気権焼(えどうまれうわきのかばやき)」は大ヒットし、京伝の代表作となる。

このヒットをきっかけに、重三郎は京伝に洒落本の執筆を依頼する。京伝は期待に応え、天明7年(1787)に「通言総籙(つうげんそうまがき)」を出版し、この作品は洒落本の代表作となる。京伝は洒落本の第一人者としての地位を確立し、その陰には重三郎の卓越したプロデュースがあった。

天明飢饉と田沼意知の刺殺事件

天明2年(1782)より冷害による凶作が深刻化し、天明の大飢饉が起こった。翌3年は浅間山が噴火して冷害に拍車をかけ、米は不作に加え商人による買い占め、売り惜しみに価格が高騰し、上野国では農民一揆が発生した。東北地方でも米価高騰に苦しむ窮民たちが商人の居宅を襲い、米騒動の波が江戸に及ぶのも時間の問題となった。意次は幕政のトツプとして米価を安定させるため、天明4年正月には米問屋や仲買たちに米穀を販売するように強く促し、米蔵の見分なども実施した。しかしその効果は薄く、同年2月には江戸近郊の武蔵国で一揆が発生し、江戸市中には不穏な空気が流れた。

天明飢饉と同時期に、意次はその身代を受け継がせるため、嫡男意知の地位を引き上げた。天明3年11月に、意知は老中に次ぐポジションである若年寄に抜擢され、父意次と同様に側用人を事実上兼任する立場となる。この事件の背景としては、佐野が役職を得たいため意次の家臣に大金を送ったにも関わらず叶わなかったことや、佐野家の家系図を意知に渡したが返されなかったことなどの遺恨説のほか、正義感から刃傷に及んだとする説がある。そして、佐野が切腹した翌日から高騰していた米価が下がりはじめたため、佐野は「世直し大明神」と英雄視される現象が起こる。米価の下落は幕府の引き下げ策の効果が始めたと見られるのが自然だが、民衆は佐野を神格化し、田沼政権は商人と結託して庶民を苦しめるとする負のイメージがさらにふくらみ、意次失脚につながっていく。

蔦屋重三郎関係年表

寛延3年(1750)	1才	1月7日：吉原で生まれる。父は丸山重助と母は広瀬津与
宝暦10年(1760)	11才	5月：徳川家治が10代将軍となる 前將軍家重の御側御用取次田沼意次、引き続き家治の御側御用取次を勤める
明和4年(1767)	18才	7月：意次、側用人に昇進
明和6年(1769)	20才	8月：意次、老中格に昇進
明和9年・安永元年(1772)	23才	1月：意次、老中に昇格。この年、吉原大門口の五十間道で書店耕書堂を開店。
安永2年(1773)	24才	この年、吉原細見の販売を開始
安永3年(1774)	25才	7月：遊女評判記『一目千本』(最初の出版物)を刊行
安永4年(1775)	26才	7月：吉原細見の出版を開始
安永6年(1777)	28才	この年、富本節正本・稽古本を出版できる株を取得
安永9年(1780)	31才	この年より、黄表紙、洒落本、往来物の出版を開始
天明元年(1781)	32才	閏5月：一橋治済長男豊千代(後の家斉)、將軍継嗣となる 12月15日：意次嫡男田沼意知、奏者番に抜擢
天明3年(1783)	34才	7月：浅間山の大噴火 9月20日：西上野で上信騒動勃発 9月：通油町の地本問屋丸屋小兵衛店舗と蔵を買い取り、移転。地本問屋の株も入手 11月1日：意知、若年寄に昇進。この年より狂歌本の出版を開始(後に狂歌絵本も出版)
天明4年(1784)	35才	3月24日：意知、江戸城中で新番佐野善左衛門に斬られる(26日に死去)
天明6年(1786)	37才	6月29日：全国御用金令発令 8月24日：御用金令、印旛沼干拓工事中止 25日：將軍家治死去 27日：意次、老中辞職 9月6日：御三家、家治の遺言により幕政に参与(9/7、一橋治済も幕政に参与) 閏10月5日：意次、2万石減封と謹慎を命じられる 12月15日：御三家が幕閣に対し、松平定信を老中に推挙(翌年2/28、幕閣は定信の起用を拒否)
天明7年(1787)	38才	4月15日：家斉が將軍職就任 5月20日：江戸で大規模な米騒動勃発 29日：定信起用に反対する御側御用取次横田準松罷免 6月19日：定信、老中首座に就任 10月2日：意次、二万七千石没収、隠居、蟄居謹慎を命じられる
天明8年(1788)	39才	1月：朋誠堂喜三『文武二道万石通』出版 7月24日：意次死去(享年七十)
寛政元年(1789)	40才	1月：恋川春町『鸚鵡返文武二道』出版 7月：春町死去
寛政2年(1790)	41才	5月：町奉行所が書物問屋仲間に出版取締令を布告 10月：町奉行所が地本問屋仲間に行事を置くことを命じる
寛政3年(1791)	42才	3月：書物問屋仲間へ加入。出版取締令違反により山東京伝の洒落本『仕懸文庫』など三冊が絶版。京伝は手鎖五十日、重三郎と行事二人は身上に応じた重過料の判決が町奉行所で下る
寛政4年(1792)	43才	5月：林子平の『三国通覧図説』、『海国兵談』が絶版、子平は仙台での蟄居 版元の須原屋市兵衛は過料30貫文、行事は過料10貫文の判決が町奉行所で下る
寛政5年(1793)	44才	7月23日：定信、老中退任 8月、美人画でモデルの名前を書き入れることが禁止
寛政6年(1794)	45才	5月：東洲齋写楽の役者絵を大量に出版(～翌年1月)
寛政7年(1795)	46才	3月25日：伊勢松坂に赴き国学者本居宣長と対面
寛政8年(1796)	47才	8月14日：美人画で判じ絵を書き入れることが禁止。秋、脚気が重くなり病の床に就く
寛政9年(1797)	48才	5月6日：重三郎病没。山谷の菩提寺正法寺に葬られる

狂歌師大田南畝との交流

蔦屋重三郎は、黄表紙や洒落本の出版で江戸の出版界を牽引し始めるが、狂歌本のジャンルにも挑戦する。狂歌とは、和歌の形式を保ちつつ、通俗的な言葉で諧謔、滑稽、諷刺の精神を盛り込んだ短歌のこと。その歴史は古く、鎌倉・室町時代から存在し、江戸時代には大衆文芸として発展する。田沼時代には狂歌ブームが上方から江戸に移り、天明期(1781～9)には最高潮に達し、天明狂歌の時代が到来した。狂歌師



『不忍池の落鷹』喜多川歌麿 画
国立国会図書館デジタルコレクション

たちは狂名と呼ばれるペンネームを用いた。例えば天明狂歌三大家の一人である四方赤良は戯作者の大田南畝だった。

南畝は、若い頃から文才が目目され、漢詩集や狂詩集を刊行し、洒落本にも進出した。黄表紙にも進出し、ついには文芸評論家として文学界から認められるほどの重鎮となる。重三郎は、南畝に執筆を依頼し、黄表紙評判記などを刊行した。重三郎は、様々な機会を通じて南畝との交遊を深め、吉原も二人の交流の舞台となった。二人が信頼関係にあったことは、南畝が重三郎の母の顕彰文

を書いたことからうかがえる。

重三郎は狂歌本を出版する一方で、狂歌師の仲間入りを果たす。自分も狂歌を詠みはじめたのだ。屋号の蔦屋と本名の喜多川柯理にちなみ、狂名は蔦唐丸という。これにより、狂歌本の出版では他の版元よりも断然有利な立場を得たことは見逃せない。狂歌師との距離を近づけることは、版元にとって狂歌本出版の早道である。その手段として、狂歌師の顔を持つことにしたと考えられる。

蔦屋と歌麿の蜜月時代

天明年間には狂歌が大ブームとなったが、重三郎は文学と絵画を融合させた狂歌絵本という新機軸を編み出す。当時の美人画は鳥居清長が一番人気だったが、重三郎は歌麿を同じ土俵ではなく、狂歌絵本という違う土俵で勝負させる戦略を立てた。天明末から寛政時代に入ると、いよいよ歌麿の芸術が絶頂期に向かっていく。この時期、歌麿の代表作となる大首絵の美人画が登場する。なかでも寛政3年から5年にかけて、蔦屋と歌麿は蜜月時代を謳歌したのだった。

主要参考文献：『蔦屋重三郎と田沼時代の謎』安藤優一郎著
文：木下直也

喜多川歌麿

歌麿は宝暦3年(1753)に生まれたとされ、重三郎より3才年下だった。出生地は江戸、川越・京都など諸説ある。浮世絵師の略伝・作風などを考証した史料「浮世絵類考」によれば、歌麿の名前は勇助で、町人・農民の家に生まれたのか、武士の家に生まれたのか、その出自は定かではない。少年の頃、浮世絵師の鳥山石燕に入門して狩野派の絵を学んだ。石燕は妖怪図を得意とした絵師で、門人には恋川春町、歌川派の祖となる歌川豊春たちがいた。

歌麿のデビュー作は、明和7年(1770)に出版された歳旦帳「ちよのはる」の挿絵である。俳諧の宗匠などが年頭にあたり、一門が詠んだ歳旦(元旦)や歳暮の発句を集めたものが歳旦帳で、歌麿は茄子を詠んだ句に寄せて茄子の絵を描いている。当時の画号は「石要」だった。その後、歌麿は「北川豊章」の画号で、黄表紙の挿絵を数多く描く。歌麿がデビューした明和年間(1764～72)は、七、八色もの豊富な色を費やした多色摺りの浮世絵木版画である錦絵が誕生した時代だった。

吉原の人々

「一目千本」の中で「葛の花」
志津山
東野絢香

葛重を慕う当代一の花魁
誰袖
福原 遥

松葉屋

松葉屋の看板新造
とよしま
珠城りょう

ある出会いが運命を変える
うつせみ
小野花梨

女郎の最高級「呼出」
松の井
久保田紗友

葛重の幼なじみで伝説の女郎
花の井(五代目瀬川)
小芝風花

葛重を慕う

五十間道

葛屋

葛重の義兄
次郎兵衛
中村 蒼

葛重を地道に支える
留次郎
水沢林太郎

絵の才能を秘める
唐丸
渡邊斗翔

葛屋重三郎の妻
てい
橋本 愛

江戸のメディア王
葛屋重三郎(葛重)
横浜流星

葛重と浮世絵の美人画を仕掛ける

客・作家・その他

盲目の大富豪
鳥山検校
市原隼人

天才絵師
喜多川歌麿
染谷将太

雛形若菜初模様の絵師
磯田湖龍齋
鉄拳

「解体新書」の生みの親
杉田玄白
山中聡

戯作者・発明家
平賀源内
安田 顕

秋田藩士
平沢常富
尾美としのり

葛飾北斎の師匠
勝川春章
前野朋哉

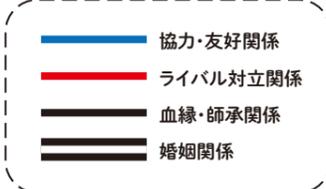
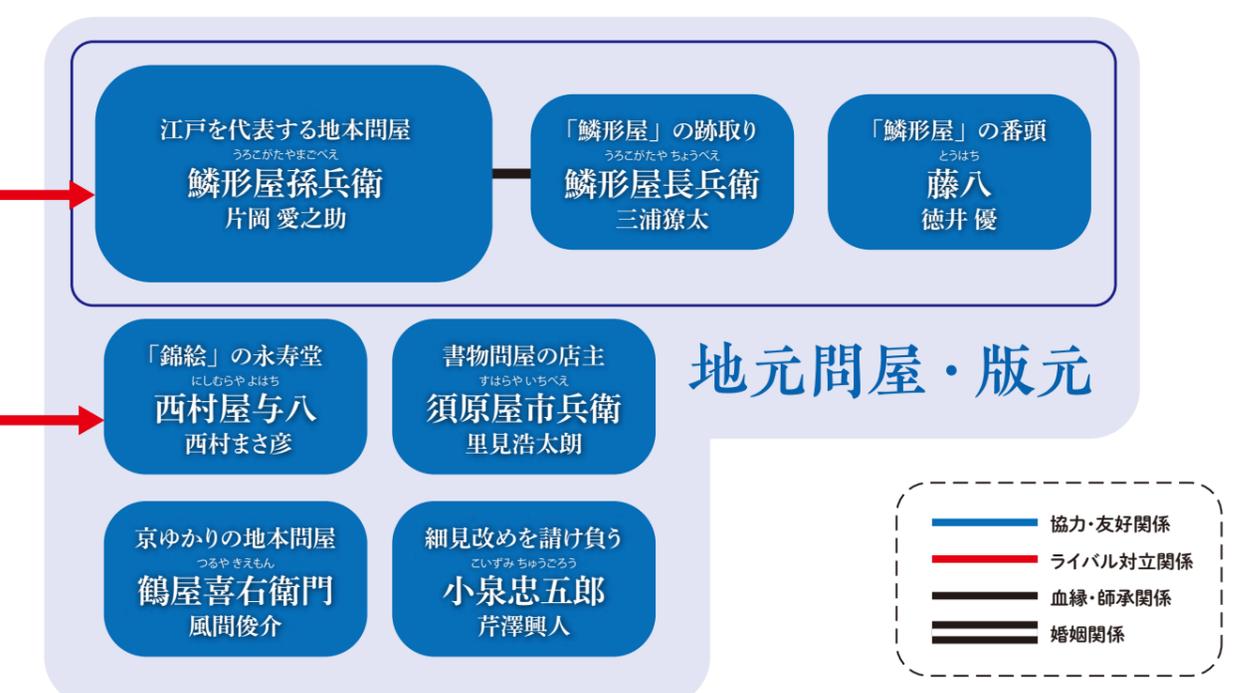
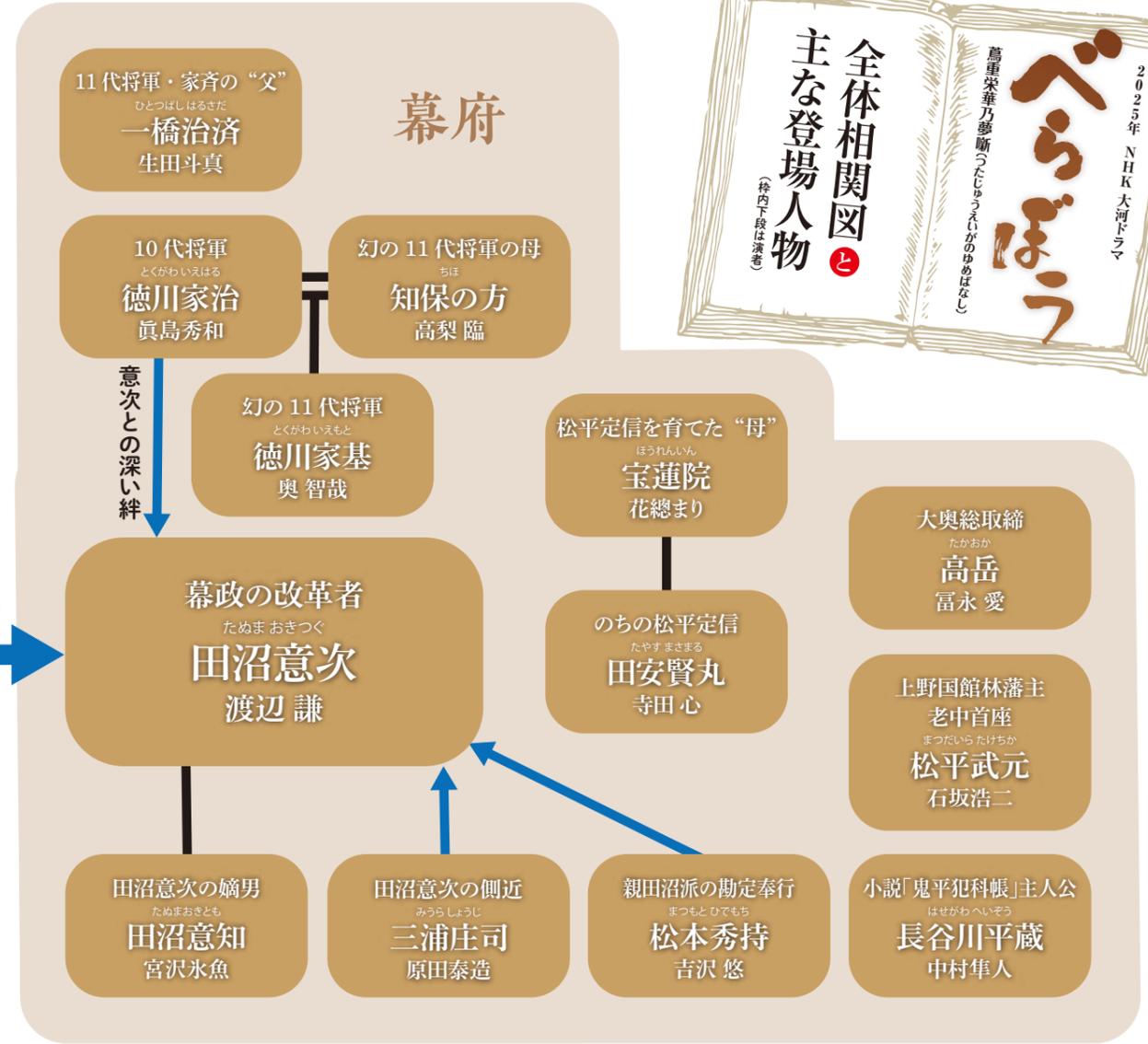
浪人
新之助
井之脇 海

出版事業を拡大

商業を重視

業界最大の「敵」

葛重の永遠のライバル



吉原遊郭 名所・旧跡をめぐる

江戸文化と 流行の発信地

吉原は幕府公認の遊郭としてのしきたりや秩序があり、非公認の遊郭(岡場所)とは異なる格式を持ち、知識人が集う文化サロンとしての顔を持っていました。篤屋重三郎は安永4年(1775)に吉原のガイドブックである「吉原細見」を出版し、吉原名物や広告など従来には無い手法を使って吉原の活性化に取り組みました。メインストリートの仲之町通りには3月になると桜が植えられるなど、せいたくに非日常が演出されました。地方から江戸を訪れた人々の人気スポットでもありました。吉原を舞台にした文芸、歌舞伎、浮世絵などは江戸の主要な娯楽になり、遊女たちの髪型やファッションが流行するなど、吉原は江戸文化の中心地であり、先端的な流行の発信地だったのです。

べらぼう 江戸たいとう 大河ドラマ館 がオープン



2025年放送の大河ドラマ「べらぼう」主演の重栄華乃夢「の」の主人公・篤屋重三郎ゆかりの地である台東区に大河ドラマ館がオープンしました。ドラマの概要紹介や、登場人物の衣装・小道具の展示、ここでしかみられない映像コンテンツ等、見どころが盛りだくさんです。また、大河ドラマ館には、お土産館である「たいとう江戸もの市」が併設されています。



花の井の衣装



篤屋重三郎の衣装

大河ドラマ館の概要

- 開設場所 台東区民会館9階 台東区花川戸2-16-15
- 開設期間 2025年7月1日～2026年1月12日
- 開館時間 午前9時から午後5時
- 最終入館時間は午後4時30分
- 休館日 毎月第2月曜日
- 主催 台東区大河ドラマ「べらぼう」活用推進協議会



1 江戸新吉原耕書堂

篤屋重三郎が新吉原の大門前に開業した「耕書堂」を模した施設です。篤屋ゆかりの地巡りの拠点としての役割も持っています。吉原に特化した観光案内や、お土産品の販売などもあり、夜間はシャッターに描かれた浮世絵をライトアップしています。



賑わう店内



2 見返り柳

吉原遊郭の名所の一つで、京都の島原遊郭の門口の柳を模して植えられたといわれています。遊郭で遊び、帰路に着く客が後ろ髪を引かれる思いで、この柳のあたりで振り返ったことから「見返り柳」と呼ばれたといわれています。



3 吉原遊郭のお歯黒どぶの石垣跡

吉原遊郭は風紀の乱れを警戒する幕府によって市街地から隔離されていました。遊女の逃亡を防ぐため、周囲は黒板塀が廻らされ、その外側には「お歯黒どぶ」と呼ばれる堀が設けられていました。吉原遊郭は現代の常識とはかけ離れた負の側面も持っていました。



4 吉原弁財天 花の吉原名残の碑

江戸時代の吉原遊郭内にお祀りされていた吉徳稲荷社、榎本稲荷社、明石稲荷社、開運稲荷社、九郎助稲荷社の5つの稲荷神社と、新吉原花園池に鎮座する吉原弁財天が合祀され、総称して吉原神社と名付けられました。社殿は関東大震災で焼失し昭和9年(1934)に再建、その後昭和20年(1945)の東京大空襲で焼失後、昭和43年(1968)に現社殿が再建されました。



5 吉原神社



6 大門と耕書堂の説明板



7 大門の街路灯

明暦3年(1657)の大火後、日本橋にあった吉原遊郭は幕府の命令で浅草千束村(現台東区千束)に移転し、「新吉原」が誕生しました。吉原大門が廓への唯一の公式通路で、門は幾度か建て替えられましたが、関東大震災で焼失し、現在は大門の柱を模した名残の街灯が建っています。安永元年(1772)に重三郎は大門の入口に書店「耕書堂」を開店し、天明3年(1783)に日本橋に進出します。



吉原大門周辺を描いた画には、「本屋重三郎」と書かれている。

安永5年(1776)出版の吉原細見 国立国会図書館デジタルコレクション



安心・安全な生活を支える福祉施設

特別養護老人ホーム竜泉

竜泉福祉センター「いきいきてらす」

— 東京都台東区 —

台東区は、多くの特性を持つ特別養護老人ホームなどの福祉施設を有する特養棟と、地域での活動場所などの機能を有する地域棟の2棟を整備しました。特養棟は、区内の特別養護老人ホーム老朽化に伴う施設を再編・集約し、地域棟は旧竜泉中学校を利用していただくもクラブの運営や、地域の催し物などに利用されます。建設プロダクトのヤマトは、給排水設備工事に携わらせていただきました。

所在地：台東区竜泉二丁目10番



竜泉福祉センター「いきいきてらす」(左) 特別養護老人ホーム竜泉(右)

特別養護老人ホーム竜泉	特別養護老人ホーム(176床、認知症対応型デイサービス等)
延床面積	9024.74平方メートル
構造	鉄筋コンクリート造 地上6階建て
高さ	27.92メートル
竜泉福祉センター「いきいきてらす」	運動室、ホール、研修室、活動室、交流ラウンジ、こどもクラブ等
延床面積	3575.23平方メートル
構造	鉄筋コンクリート造 地上6階建て
高さ	33.67メートル
施工業者	建築 松村・石井・大三・増田 電気 日本電設・テイク・鈴木 空調 須賀・眺飯島・浅草 給排水 ヤマト・當木・浅草 特定建設工事共同企業体



特別養護老人ホーム竜泉 玄関



特別養護老人ホーム竜泉 外観



(仮称)竜泉二丁目福祉施設及び地域施設新築給排水設備工事 施工完了写真



施工完了写真



施工完了写真



台東区役所1階 玄関前

台東区役所総務部施設課 主事 新藤 貴秀様

私は今年の4月から当該現場の担当になりました。まず現場の状況を把握すること、現場代理人の新井さんから図面や書類のことなどを詳しく聞くところからスタートしました。ヤマトさんの施工は工場加工でステンレス管を使っているので、継ぎ目が少なく納まりがきれいで、現場作業が軽減され工期短縮にも寄与したと思っています。管理面では、協議事項が発生するたびに、工事側の意見を聞きながらすり合わせをし、調整していききました。衛生工事の主な特色は以下となります。

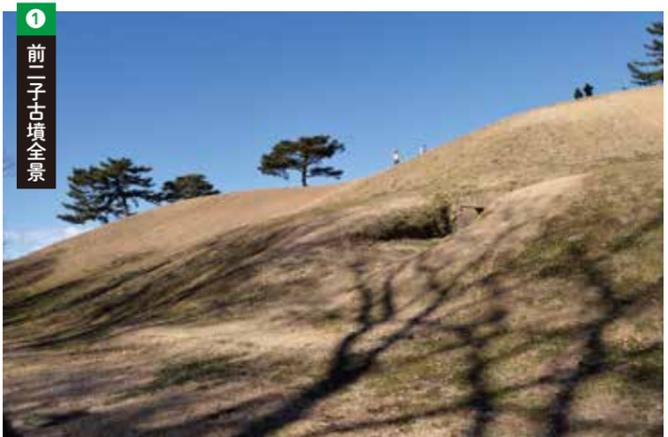
- 避難所の機能を有することに考慮し、2棟とも受水槽を2階に設置し、浸水対策を行った。また、受水槽に緊急遮断弁を設置することで災害による配管破損時に、飲み水が流出しないように水源確保を行った。
- 特別養護老人ホーム竜泉では常時浴室利用があることを加味し、貯湯槽をメンテナンスしている際にもお湯が利用できるようにバイパス配管をヤマトの代理人と検討して実現した。
- 竜泉福祉センターにはマンホールトイレを整備し、断水時には井戸水を使用することで仮設トイレを使用出来るように整備した。
- ガスは災害時に被害を受けにくく復旧の早い中圧ガスを採用することで、災害時にも安定してガス利用が出来ることで空調も使えるように設計を行った。

私はヤマトさんと初めて仕事をしましたが、現場管理のレベルが高く、スムーズに仕事をさせていただきました。大変助かりました。新井さんには教わることもあり、私の知識や経験不足をフォローしていただき、感謝しています。工期が厳しい中、うまく進めていただき、ヤマトさんの「尽力で質の高い施設が完成しました。」

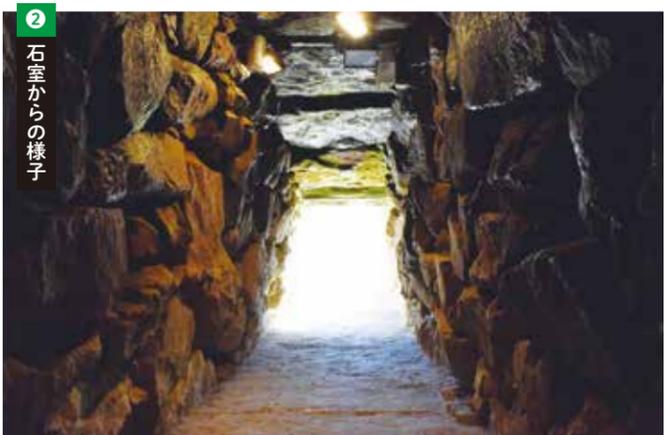
大室古墳群

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 専門員 多賀谷 蓮

赤城山南麓最大の古墳群



1 前二子古墳全景



2 石室からの様子

古墳群の概要

今回紹介する古墳は、前橋市西大室町に所在する大室古墳群です。JR東日本「大人の休日倶楽部」のコマーシャルで、女優の吉永小百合さんが訪れた古墳だといえど、存じの方も多でしょう。

「大室古墳群」は通称で、この地域にある複数の古墳をまとめて表現する際に使われます。そのうちの「前二子古墳」「中二子古墳」「後二子古墳」ならびに小古墳」の四つの古墳が史跡となつています。明治十二年に当時の荒砥村民の手に

よつて前二子古墳および後二子古墳の発掘調査が行われ、多くの副葬品が確認されました。その後、これらの古墳は昭和二年に国史跡の指定を経て、現在は日本キャンパック大室公園として整備され、多くの人々で賑わう遺跡となつていま

古墳の時期とかたち

各古墳とも前方後円墳（鍵穴状のかたち）です。上空から見ると、どの古墳も東西方向を軸にして築造されていることがわかります。築造時期は古墳時代後期の6世紀で、古い順に並べると、前二子古墳（6世紀前半）→中二子古墳（6世紀中頃）→後二子古墳・小二子古墳（6世紀後半）となります。被葬者に血縁関係があるのかは分かりませんが、地域の有力者の墓が代々つくられたようです。

もつとも規模が大きいのは中二子古墳で、墳丘は全長二一〇m・高さ二四・八mを測ります。墳丘は二段にわたつて築かれており、約三〇〇本もの埴輪が樹立されたと推定されています。古墳の周りをぐるりと回つてみると、その大きさを実感できるでしょう。

県内最古級の横穴式石室

古墳時代のはじめごろの埋葬施設は、墳丘頂部に上から穴を掘って造る竪穴式石室でした。古墳時代の後期になると、墳丘の横側に入口を設ける横穴式石室が造られるようになります。前二子古墳は、県内でも早いうちにこの横穴式石室を導入した古墳です。石室の入り口は開口されており、実際に石室内に入ることができます。山石を積んだ暗い石室の中から外に目を向ければ、この古墳の被葬者になつたかのような気分を味わえるでしょう。一番奥には須恵器等の副葬品が復元されて埋葬当時の状況に置かれており、当時のまつりの様子を伺い知ることができるようになっています。

豪華な副葬品の数々

前二子古墳からは様々な副葬品が発見されました。ガラスや水晶でできたビーズ、純金製の耳飾り、管玉・白玉といった装身具のほか、鉄のやじりや農具、さらには馬を飾るための装具なども出

土しています。これらの副葬品には朝鮮半島にルーツがあるものも入っており、被葬者が時代のトレンドをいち早く取得できると、ヤマト政権と深いかかわりのあった人物だったことがわかります。

古墳群までのアクセス

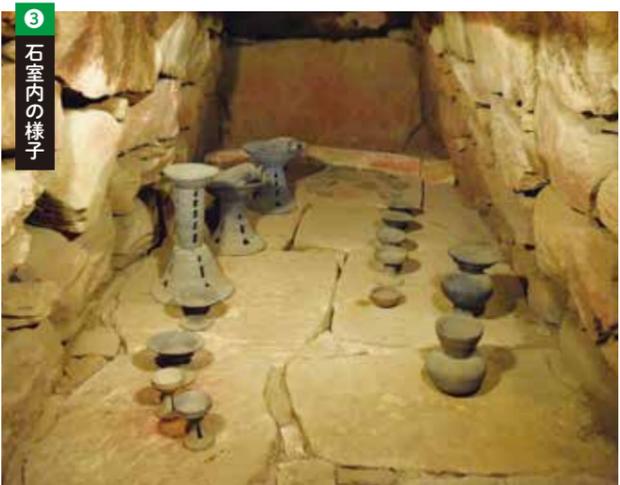
自動車での来跡をおすすめします。北関東自動車道波志江スマートインターから北へ向かうと約二五分で到着します。公園の南北に広い駐車場があります。古墳のほか復元された竪穴建物もみることが出来ます。学びを深めたい人は、ぜひ参考資料を一読してから史跡へ行つてみてください。特に保存整備事業報告書には、玄人向けの詳細な情報が載っています。事前に調べてから、史跡をめぐると面白いです。

参考資料

- ・前橋市教育委員会編「2005 大室古墳群 史跡前二子古墳・中二子古墳・後二子古墳をめぐり」
- ・小古墳 保存整備事業報告書
- ・前橋市教育委員会編「2015 「東シヤアから見た前二子古墳」
- ・群馬県教育委員会編「2017 ぐんま古墳探訪」

写真提供

- 1 前橋市教育委員会



3 石室内の様子



4 副葬された装身具



5 馬の装具



6 大室古墳群までの地図 (地図・地理情報回を著者編集)

池田実穂

美術研究家 染谷滋

木版画でアートの可能性を広げる

自然の中の少女

池田実穂の版画作品には、少女が登場することが多い。野原を駆け巡り、木々を見上げ、風に髪をなびかせる。雨の日は傘を差し、ときには寂しげな表情も見せるが、たいていは目を輝かせ、強い意志を見せている。少女が登場しない作品でも、鳥や魚などの生き物が、

大自然の中で伸び伸びと動き回る。木版画特有の明快な形が、動きを伴った構図の中で躍動している。色彩は明るくカラフルで楽しい。

最近、少女の年齢が少し上がったと思わせる作品が多くなった。昨年の《少女四景》などは思春期を感じさせてくれるし、《火の穂》では力強い女性像を狙ったと語っている。作品の中で少女も成長しているに違いない。

月夜野町から

カッターラへ

池田実穂は一九七八年（昭和五三）二月、利根郡月夜野町に生まれた。月夜野町は二〇〇五年（平成一七）一〇月の町村合併でみなかみ町となり、月夜野という美しい名称は町名から消えた。池田はそのことをひどく残念がっていたが、ロマンチックで美しい響きの月夜野町の生まれであることを、今でも誇りに思っている。



「駆ける一。」2025年制作 木版画 52x40cm

イタリアと日本を行き来

彫刻から木版画への転進と聞くと、随分と大きく方向転換したように思われるが、実は「彫る」という点で共通

していた。それでも西洋で版画といえば銅版画か石版画が主流で、木版画は馴染みのない技法だった。道具をそろえるのにも苦労したようだ。

木版画を始めてからもアカデミーでの彫刻の勉強は続け二〇〇九年に卒業。その間も積極的に版画の個展を開いた。最初の個展は二〇〇六年で、カッターラに近いマツサ市と、日本に一時帰国して東京（阿佐ヶ谷）と伊勢崎市（ギャラリー・ライム）で開催。その後はイタリアと東京、大阪、群馬を中心に作品を発表する活動が長く続く。

アカデミーを卒業してからも帰国しなかった理由は、現地で日本人の彫刻家と結婚したからだ。イタリアが好きだったことも大きな理由だろう。

私が初めて池田実穂とその作品に出合ったのは二〇二一年で、高崎のギャラリーART-Gでの個展だった。このギャラリーではその後も毎年個展を開催している。

職人的な作品制作

日本では浮世絵の時代から木版画は盛んで、学校で学んだ経験のある人も多いから説明は不要かと思うが、原画制作だけでなく版木を彫り、紙に摺るという工程があって、ある種職人的な仕事だ。池田実穂のように色数の多い作品では、色の数だけ版木を彫ることもなり、版ズレを避けるための正確で慎重な作業が必要になる。良く知られているように、江戸時代には分業によってそれぞれ得意な工程を受け持ったが、今日ではすべての工程をひとりで行なうのが普通だ。

池田実穂は「木版画が自分にピタツとはまった」と記

している。原画制作の真っ白な紙に鉛筆を動かすワクワクした気持ち、下絵をトレーシングペーパーで版木に転写する緊張感、彫刻刀で版木を彫る楽しさ、身体全体を使う体力勝負の刷り、どの工程にも若手意識はなく、完成したときの達成感が一番好きだと語ってくれた。

ヌマタ・アート・アンバサダー

新型コロナウイルス感染症が世界中に広がり、イタリアとの往復が困難になると、池田実穂は一七年間住んだイタリアを離れることを決意して、故郷に近い沼田市内にアトリエを構えた。二〇二二年（令和三）夏のことである。

その年の一〇月一日、沼田市は「ヌマタ・アート・アンバサダー」に池田実穂を委嘱した。芸術文化で市の発信力を高めたいという沼田市の新しい制度で、翌年には篠笛・能管奏者の富澤優夏も加わった。

アート・アンバサダーとしての活動は、市庁舎内での展覧会の開催をはじめとして、公開制作や講演会、ワークショップなど多岐にわたっている。池田の美術をもっと普及させたいという気持ちで、市の方針と一致した結果だ。

近年の池田実穂の制作活動は、木版画だけに限らない。アクリル画やペン画にも制作の範囲を広げ、二〇二三年の沼田市役所でのライブペインティングでは、アクリル画の大作も制作している。彫刻への再挑戦も内に秘めた思いのようだ。

本年二月には、二〇二四年度の企業メセナ群馬奨励賞を受賞した。池田実穂の活躍の舞台がさらに広がることを期待したい。

略歴 池田実穂 MIHO IKEDA

- 1978 利根郡月夜野町（現在のみなかみ町）に生まれる。
- 1997 群馬県立沼田女子高校卒業後、東京学芸大学教育学部入学。
- 2001 東京学芸大学教育学部小学校教員養成課程美術科卒業。
- 2003 東京学芸大学大学院教育学研究科美術教育専攻修了。
- 2004 イタリア、カッターラ国立美術アカデミー彫刻科入学。
- 2005 木版画の制作を始める。
- 2006 イタリア（マツサ市）、日本（阿佐ヶ谷、伊勢崎市）で初個展。以後、毎年帰国して各地で個展発表を続ける。
- 2007 第8回国際イラストレーション・コンペティションで佳作。
- 2009 イタリア（マントヴァ市）、ギャラリー・アリアンナ・サルトリで個展（以降2回）。
- カッターラ国立美術アカデミー彫刻科卒業。
- 2010 東京、八重洲T・BOXで個展。以後2016年まで毎年。
- 2011 大阪（高槻市）、アート・アート・ビューで個展。以後毎年。
- 高崎、ギャラリーART-Gで個展。以後毎年。
- 2013 前田司郎「夏の半魚人」（新潮文庫）の装丁画。
- 2014 ノルウェー・ウス市国際絵画シンポジウム（現地で公開制作）に日本人作家として参加。
- 2015 東京、ギャラリーHANNA下北沢で個展。以後毎年。
- 2016 沼田三十六景を制作、包装紙として沼田市内に配布。
- 2018 ミラノ日本国総領事館で個展。
- 2021 帰国、沼田市内にアトリエを構える。
- 初代ヌマタ・アート・アンバサダーに就任。
- 2022 京都市・中井ギャラリーにて個展。以降隔年。
- ヌマタ・アート・ウィーク2022で木版画を公開制作し、その作品を市役所と市内の小中学校19校に寄贈。
- 2023 第26回鹿沼市立川上澄生美術館木版画大賞入選（前年のヌマタ・アート・ウィークで制作した版画）。
- ヌマタ・アート・デイ2023でライブペインティング。
- 2024 2024年度企業メセナ群馬芸術文化奨励賞受賞。